慶應義塾大学学術情報リポジトリ

Keio Associated Repository of Academic resouces

| Title | 諏訪信仰の太陰的要素序説 |
|------------------|---|
| Sub Title | Lunar symbolic elements of the Suwa belief |
| Author | 福島, 邦夫(Fukushima, Kunio) |
| Publisher | 慶應義塾大学法学研究会 |
| Publication year | 2011 |
| Jtitle | 法學研究 : 法律・政治・社会 (Journal of law, politics, and |
| | sociology). Vol.84, No.6 (2011. 6) ,p.279- 295 |
| JaLC DOI | |
| Abstract | |
| Notes | 十時嚴周先生追悼論文集 論説 |
| Genre | Journal Article |
| | https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-20110628-0279 |

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって 保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

諏訪信仰の太陰的要素序説

福 島 邦

夫

甲賀三郎伝説 蛙 太陰的信仰 祭礼行事

はじめに

はじめに

るが、 と呼ばれる一 昨年平成二十二年は、 秋宮の合計四社の四隅に十六本もの柱が立てられるわけであるが、 定説はない。 通常一本立てる)が行われる。この御柱がいかなる意味を持つのかについては、いくつかの説があ この御柱について若干の考察をしながら。 信州諏訪の御柱祭が行われ、二百万人もの見物客で賑わった。上社前宮、本宮、 諏訪信仰の特殊性を見ていきたい。 同時に諏訪地方の諸社でも御柱祭 下社春 (小宮

諏訪

の御柱の意義については、

宮坂清通によれば、仏教方面、(1)

神道方面からの二説がある。

仏教的側面からは

お遠隔 諏訪の神事の持つ祭祀の特殊な内容から、 と同時に行われている点である。伊勢の二十年毎に行われる遷宮にも、五尺の巨木の 行っているところをみると、四本という数にこだわる必要はない。ここで注目されるのは神祭料説で、ウラルア 四無量 ぶハシと考え、宮地直一も招代としての巨大なる樹木を祭ったと考えている。また、注目されるのは宝殿の造営(2) 宝殿の造営と共に、柱立てを行ったとするものである。 察しない。 ルタイ民族の神竿、蘇塗(ソト)と同様神の降り至る神木であるという考えかたである。 地にいるために資料の不足もあり、 四抄説、 一番有力なのは神道からの宮殿表示説で、寅、申の七年 四王擁護説、 独古説などがあるが、これらは仏教が国家的宗教になった後の付会説として今は考 原始信仰に淵源を持つものと考えたい。 詳論は別に機会を譲ることにして、ここでは概略を述べてみたい しかし、同地方の諏訪大社以外の小宮が一本の柱立てを (実際は六年)毎に宝殿を造り替えるに際して、 評論の量も限られており、 「心の御柱」 折口信夫も天と地を結 が立てられる。

大祝

けない。 その住居を御神殿とした。四、大祝の下知をもって、神宣とした。五、 これを御そぎと言った。年中四度の御狩(後述)に山鳩色の狩衣を着用した。山鳩色は禁色の一つである。三、 居常清浄に保つべきこと。このため、 色がある。 諏訪大社にご神体なく、大祝自身をもって神体となすと言う。大祝は諏訪神官の最高位であり、 七、没後特殊な扱いを受けたこと。遺体は一度神前に出されたという。 宮地直一によると、一、童男をもってこれに当てる。年齢を八歳とした。二、童男に御衣を着せた。(4) 大祝は (一) 郡外に出ず、(二) 人馬の血肉に触れず、 毎年神影に接するをならいとした。六、 伊藤富雄は大祝を神のよりまし いくつかの特 死穢の服をう

ついて触れておこう。

ねばならぬ。」と言い切っている。大祝はまた、 宮地直一は「大祝はどの点からしても、 覡の本質を具備し、その始め神の御子として起こったものと言わ 風の祝として中央に知られていた。

「信濃なる木曽ぢの桜さきにけり風のはふりにすきまあらすな」 源俊頼

らすきまもあり、 き物に籠め居ゑて、 「これは、 信濃の国は極めて風早き所なり。 日の光もみせしめつれば、 祝ひして百日の間尊重するなり。然れば、その年はおよそ風閑にて農業のために吉きなり。 風納まらずと云々」 仍りて諏訪の明神の社、 藤原清輔(6) 風の祝と云ふ物を置きて、これを春の始 (岩波日本古典文学大系による) め に深

まで残っている。 していたとされる歌集である。また、 の光が入ってしまうので風が納まらないというのである。『袋草紙』 せて、農業のための平安を祈ったものである。 『袋草紙』におさめられた、 歌とその解説である。 諏訪神の風よけのための祈りとして、 歌は塗り込めた室の隙間から日の光が入らないように祈るが、 きわめて風の強い 信濃地方に風の祝を冬の は平治元年 薙鎌を木に打ち付ける信仰は近年に (一一五九) 以 間 が前には一 百 H 既に 間 籠 成 H

五三の事』)とあるように童男であった。 大祝は室町時代の諏訪 の神楽歌 「生まるるも、 御立てまし神事の神使七人も幼童である。ここで、その就任の儀式に 育つも知らぬ人の子に 神髪着せて 神の子にせん」(『御七

最後の 0 西に 大祝は神氏の童子より選ばれて神殿において三十日間の精進をする。 ある楓の宮の三本の木の下、 十日が巳身清浄である。その十日ごとに、火と衣服、 烏帽子状の小岩座に葦を敷いてすわり、 器物、 畳などすべてを交換する。 始めの十日が外清浄、 お歯黒など成人戒の化粧を施され 次の十二 職位の儀は、 Ė が 内清 神殿 浄

せ、 後、 ŋ しては不浄なる事あるべからず云々」(『年内神事次第旧記』) 神長守矢氏により狩衣を着せられる。このとき、童子は神になる。その後十三社に詣で、 大祝の魂床である御魂殿に入り、「我身は既に大明神の御正体と罷成候ひぬ と神の寄りつく器となるのである。 清器申給はりて定なり、 土地神に挨拶すま

祭礼行事

解釈は宮地直一、伊藤富雄、田中基の著作によっている。^{(8)(8)(9)(⑴)}「年内神事次第旧記』(以下旧記と略、十五世紀末成立)を中 次に大祝の動きを中心にやや変則的になるが、上社を中心に 十五世紀末成立)を中心に諏訪の 『諏訪明神画詞』 上社の主な冬の祭事を見ていこう。 (以下絵詞と略、 室町初期成立)、 その際

十二月末の行事からみていこう。

解釈は宮地直一、伊藤富雄、(8) (9)

御室入りする。これを「穴巣始」と呼んでいる。 萱で屋根を葺いた竪穴式の小屋である。 大祝と神官は饗膳の後、稻束を重ねた上に夏鹿の皮を敷き、その上に幼童である大祝が座す。(11) の御祭り、十二月二十二日 御室が神原の一角にある内御魂と前宮の間に建てられる。御室戸は大穴を掘り、 その中に 神が冬ごもりのため穴に入るのである。 「萩組みの座」をもうけ、 神座とする。所末戸社神域を詣でた 饗宴の後、 大祝は

蛇となり、長大なる御房をもって現る。すこぶる異様な風景であると宮地直一は述べている。(ユン) る。 擬祝神事、十二月二十三日神体として「萩組みの座」に大県、内県、外県より、それぞれ小蛇三体が導入され このとき、「そそう神」が出現し、喜び仕えるという。これ以外にも竈神、 年神等を入れる。 そそう神は大

される。鏡と人形が持ち込まれる。 十二月二十四日、 大巳祭、 饗膳の後 萩組とは御室の内部にさらにつくられた建築物でここに入ることができるの 「萩組みの座」に御笹の御佐口神が左頭より、 小蛇三体が 右頭より、

は、 今春の頭役、 直一は指摘している。 大祝、 神使、 神使役を決める。このとき、 神長だけである。ここで、大祝は大祝詞を述べる。一月一日深夜、 御佐口神はいびきをかいて眠るという。これも蛇体信仰の顕れと宮地 薄の実をもって草占をして、

この蛇体に向かって口習の申し立てをする。このあと、とぐろを巻いた形におり重ねられて、 曲が舞われる。この神事は徹夜でおこなわれ、「大夜明」の神事と呼ばれた。 寸、萱、赤楊木、で編まれたものである。 十二月二十五日、大夜明の神事、 大県、 むさてと呼ばれるかざりの麻、 内県、外県より、 大蛇三体が導入される。長さ五丈五尺、太さ二尺五 紙をつけて神霊をつけ、 歓迎の二十番 神長、 神

ている。そそう神はこれに対して狩猟の神と考えられている。 伊藤富雄はさらに、考えを進めて、同信仰が江戸時代に盛んになったところから、 棒信仰と習合されたという。しかし、 は湛えによって、崇拝されたものであり、 「シャクジ」等による土地丈量の神等という説明がある。 三月卯日祝日まで二カ月あまりを御室内で過ごすことになる。御佐口神は未だ定説はない 宮地 直一によると御佐口神は、そそう神ともに、二十二日から、交互に御室に入れられるという。 御佐口神は民俗考古学的にみて、 土地神であり、 しかし、宮地直一はこの地方一円に広がった御 祟る要素ももっていたゆえ尊崇されたという。 石棒の形態の方が古いと筆者は考える。 御佐口神は農業神であるとし が、 柳 田 国 男による 蛇形 神

終えた後、 に浮かびあがると信じられている。 十二月二十八日、 十二月晦日 深夜に葛井の池に弊物を葛井本殿の後ろより井戸に投げ捨てる。 御室並びに葛井神事、 磯並 神事、 饗膳の後、 年男と小別当がそれぞれ、年神と釜神に擬せられて盃事を行う。 山神小袋石にも奉幣する。 各地から九人の神主、 これらは遠く離れた遠州のさなぎ池 命婦などが参拝する。

宮地直一によると、 正月一 Ħ, 年入れ神事、 蔦をもって餝った椀飯をい れ、 次ぎに年を入れる。 年とは稻を表

郷を決める神事である。

たと言う。

小石をもってこれを当てた。 次いで綱引きを行う。 さらに神使御頭御占神事を行う。 これ は神使を出す御 頭

洗河に向かい、 小矢をもって射る。これを串にさして生け贄とする。 そして、 蝦蟇 土を穿って、 (蛙) 狩の神事を行う。(これは現在も続いている神事である) 氷を張った表斧鉞を打ち砕けば、 捕獲した後、 珏 宝殿に面する舞台に至ってこれを丸焼きにし 六匹の蝦蟇が出現する。 元日の神拝に続き、 これを、 大祝一行は御手

第八はトーテミズムに起因する享用的食物と考える説である。 ではなく、拝みの対象としたとものべており、筆者もこれに賛同する。 直 伊藤富雄はこれを諏訪地方の太古からの食生活の反映としている。 は第一説として、 祭神の蛇神説に対する生け贄とする説である。 第二、 害獣説、 第三、 狩猟、 豊作の祈願説、 第七は人間の代わりに犠牲となって捧げられたとする説 しかし宮地はこれをさらに進めて、 第四、 蛙を食した風習の名残とする。これを宮地 狩猟式の現れとする説、 第五、 神供にする 蝦神説

と云々」。 蝦蟇神(かえるのことなり)荒神となりて天下を悩ます時、がまのかみ 鎌倉時代末に諏 訪信仰の要説として書かれた 『陬波私注』には、「一、 大明神之を退治して御座すとき、 陬波と申事なみ しつかなりとよ 匹 海 静謐之間 陬 波

治し彼の穴を石をもってふたきて、其の上に座したまふ間、 う一つは大門峠にある。 これに関して、 これを金井典美は、 諏訪には「御座石」と呼ばれる神聖化された岩が二つある。一つは茅野市矢ヶ崎 蛙 の単純な荒神化身説とはいえず、蛙は、 『陬波私注』に「石の御座と申すは、 石の御座と申す也、 件の蝦蟇神住む所の穴竜宮城に通す。 蛇と同様に湿原の神であるという。 口伝之在り」。 0 蝦蟇神を退 御 座

上田 市にある生島・足島神社でも正月三日に池のある社殿に渡る橋の上で蛙狩りの神事が為されている。

式 料不足の為、考察は今後に持ち越したい は の小 な 県郡 生島 の名神として祭られ、 足島神社は本来諏訪神社であったとも指摘され、 諏訪神社に次ぐ神社であるが、 元文五年の火事によって資料は消失しまって今 御籠祭」もあったことがしられているが、

事 という。 的 主 木など、「 神長守矢氏の祀る神であり、 を行う。 である。 な信仰 夜に入って神使殿御頭御占神事を行う。これは六人の神使、 は古来より、 神の位置を譲った者とされる。 御佐口 御佐口 御佐口 ... の 一 湛」と呼ぶ場所に御佐口神の降りる場所がある。 端を表すものと言えよう。 神 神 神はすでに述べたように石棒の形で表わされることが多い。 上社七不思議の一つとして考えられ、 は弥 は以下にのべる神使三県廻湛 生 時代からの 農業の神、 その結果 原始神であり、 穀物の神、 「諏訪大神大祝」 神事 狩猟 記紀の上で祭神とされる健御名方神に新し ずでも、 管見のわずかな資料で断言はできない の神で、 が現人神をして成立したと説いている。 湛において御 御佐口神は信濃から、 村神主十四人の御佐口神を降ろしてつけ申す 祟りの 強い 佐口降ろしを行 神であるという。 御佐口神は諏訪市史によれば、 中 部、 関東に方面に分布する が、 大岩石 村神主もまたこ い政治勢力により 諏訪 これらの行 神社 巨 木 の古代 神事 元 珍 々

三月未の日の「御室御出」まで、百日間大祝一行はこの室屋に籠もる。

人の 事 宝鈴をならし、 声 神使たちは大県、 ĺţ 四 人の村代神主と六人の神使たちは前宮原に集まる。 巨 樹、 豊作を祈るものである。この「(18) (18) (18) 外県、 内県を巡り、 この日に御室は撤去される。 湛 0 御 村民を集め 佐口 おろし神事を行う 三月丑日にここで「御左口あげ」 た後、 神使は御杖柱を突き立て、 その後大祝から、 (廻湛神事)。 御杖 が行 御 柱 左 われる。 を授かった六 神を降 廻 湛

行事、 大祝は後に四 六月二十七日より三 度の物忌籠もりを八ヶ岳麓の神野 H 間 0) 御作田 御狩行事、 0 穂屋において繰り返す。 七月二十六日より、 前 後 五 旧 H 五月二日より 間 0) 御 射山 御 0 三日 狩 行 間 事 0 押 九 月 立 御 下 狩

宿 人身、同証仏果」、としてこれは慈悲の教えであることを説き、この言葉を唱えることにより、しゅくじんしん どうしょうぶっか として、 巳亥三日間 と箸が売られている。 れた。これは 食)に用いられた。『旧記』に「鹿なくては御神事すべからず候」とある。 行事のお供えに殺生を行うことに矛盾が生じてきた。 人間に食べられることによって、 熊 0) 猿・ニク(カモシカ)・イワナ・山鳥があげられ、それ以外の鳥・ 秋 訪信仰における狩について述べておこう。 画 庵 詞 の御狩行事である。 のなかで元旦 成仏すると説くものである。 一の蛙狩り神事について、これを御贄の始めとし、 その際、 大祝一行は各所に建てられた仮小屋である穂屋に籠もるのである。 鹿・鳥・猪・兎・魚などである。 仏教の興隆とともに、 現在でも諏訪神社では本宮で「鹿 諏訪神社の御贄にしては、 古来から行われてきた上社 鹿 魚は御贄に 「業深有情、 その肉は神人相 食免」 しても良 難放不生、 罪深 なら という札 い動 ぬ 0 物 とさ 動 共 故こ が 物 中

甲賀三郎伝説

0) 研究によりそれらを見ていこう。「神道集」は鎌倉時代の安居院法印による説教唱導の台本である。(32) 諏訪 一神の蛇体であることを有名にしたものに「甲賀三郎」 伝説がある。 松本隆信 の「神道集」 の 研₍₁₉ 究) 福 田 晃

の諸本の分類がされているが、ここでは、より古いと考えられる諏訪系をとることにする。 「神道集」巻十「諏訪縁起事」の要約を松本隆信による梗概をもとに以下に示す。同氏により、(21) 諏訪系と兼家系

海道十五ヶ国をあたえる。 安寧天皇より五代の孫子、 国の総追補使であったが、 諏胤の死後、 甲賀権守諏胤に太郎諏致、 死に臨んで、 三郎は帝の見参に入り、 太郎に東山八ヶ国、 次郎諏 任、 重ねて、 次郎に北陸道七ヶ国、 三郎諏方の三兄弟があった。 大和守を賜る。 三郎には惣領として、 神拝のために三笠山 諏 胤 は東三十 明

明

神と顕

れ

催した時、 神に参籠 0) 天より変化のものが降って姫をさらい、 折、 春日権守の孫、 春日姫に契りをこめ、 行方不明となる。 甲賀へ伴って帰る。 三郎が春日姫をつれて伊吹山で巻狩を

送る。 江 猜む二郎のために頼みの綱を切られ、 三郎は二人の兄と共に日本中の嶺々をめぐって、 0 湖 0) 北岸戸蔵山 人穴の底で姫を発見し救い出す。 の麓で殺そうとしたところ、 地底に取り残される。 しかし姫が忘れた唐の鏡をとりに、 三郎ゆかりの者が通り 春日姫を探すが尋ね会わない。 二郎は 春日姫に言い寄ったが姫は靡 かかって助け、 再び穴に降りたところ、 最後に信濃の蓼科嶽を尋ね 春日姫を祖父権守の かない ので、 許 近 た

に着 嶺に出ることができた。 0 故 教え通りに、 郷 穴の底に残された三郎は、 0) 春日姫のことを思って涙を流しているのをみた維摩姫の計らいで、 た維縵国 で、 鹿の生き肝でつくった一千枚の餅を一日に一つずつ食い、 主の好美翁に引き留められ、 詮方なさに足に任せて歩き、 翁の三女維摩姫に契りを込めて十三年を送る。 七十三の人穴を過ぎ、 翁より日本へ帰ることを許される。 千日の旅を経て三郎 七十二の 国々を遍歴する。 ある夜、 は信濃国 間 最 が 後 0

僧は近江国 のことが語られ、 がいると騒ぐ。 は甲賀へ帰り、 の兵主大明神であった。三郎は兵主大明神とつれて三笠山 蛇体になったことを恥じて仏壇の下に隠れていると、 蛇体を脱する方法を教えられる。 父の為に建てた笹 岡 の釈迦堂に宿ると、 この僧達は諸所の 御堂の講に集まってきた人々が、 崩 その夜集まった僧たちの へ赴き、 神 権現で、 春日姫との再会を遂げる。 三郎のことを語 液伽の 郎 の物語に三郎 0 を見て大蛇 た口 立

神 0 一郎と春日 請 願によっ H 歴 は て再び日本へ帰り、 天早 -船に乗 って震旦 三郎 0) は諏訪の上宮、 南平城国 行き、早那起梨天子より 春日姫は下宮と顕れた。 神道 維摩姫もまた日本へ来て浅間 0) 法を授かる。 二人は兵 主 大明

ようになったのである。

権守は赤山大明

神、

母は

日光権現と現じた。」

甲賀二郎も先非を悔いて罪を許され、 若狭の 国 0 田 中明神と顕れ、 また太郎は宇都宮の示現大明 神、 父甲 申 曾

神社もあり、 伝えられた物である。 ところで、 その物語は甲賀郡水口宿の大岡寺の話として語られていた。 甲賀三郎の伝説は滋賀県甲賀郡には三郎の後裔と称する望月氏にも伝えられている。 伊 賀にも伝えられ 諏訪社が多く勧請されている。 広く流通した兼家系の諸本はこちらに そのため甲賀三 郎譚は世人に知られる そこには 諏 訪

太陰的信仰

以上のように、頻出する蛇や蛙の象徴をどう理解すべきであろうか。

常陸国風土記行方郡の蛇の記事を見ていこう。 ⁽²²⁾

夜刀の神に告げていひしく「此より上は神の地と為すことを聽さむ。此より下は人の田と作すべし。今より後、ゃっ きに怒の情を起こし、甲鎧を着被けて、自身杖を執り、打殺し駆逐らひき。乃ち山口に至り、 しむることなし。俗いはく、蛇を謂ひて夜刀の神と為す。 葦原を 截 ひ、墾闢きて新に田を治りき。此の時、 の祝と為りて、 「古老のいへらく、石村の玉穂の宮に大八洲しろしめし、天皇の御世、人あり。箭括の氏の麻多智、 永代に敬ひ祭らむ。 ながは く は、 な祟りそ、な恨みそ」といひて社を設けて初めて祭りき、といへり。」 夜刀の神、 其の形は蛇の身にして頭に角あり。 相群れ引率て、悉盡に到来たり、左右に防障へて耕佃らればいます。 (中略) 標の梲を堺の堀に置てた 是に麻多智、大 郡より西の谷 **(**岩 神

波古典文学大系による

自然と人間との境界を麻多智という人物が大蛇となった自然神と対決して定めたという良く知られた記事であ

る。ここでは自然は蛇という姿で表されている。

で大正十五年に採集された「月のアカリヤザガマの話」である。 蛇にはまた、月との結びつきがある。よく知られたN・ネフスキーによる月と変若水の話がある。 沖縄宮古島

ことになった。沖縄では現在でも新年の始めに汲んだ水を浴びれば「卵で水」と言って生まれ変わるという信 が残っている。 も脱皮して生まれ変わり、 大蛇が現れ、その変若水を浴びてしまった。アカリヤザガマは困って死水を人間に浴びせた。こうして蛇は何度 てアカリヤザガマをお使いになった。一つには変若水、一つには死水を入れてきた。ところがどこからともなく ていた頃の話である。 是は昔々大昔この大宮古に始めて人間が住むようになった時の事だそうである。お月様お天道様が真上に輝 人間たちが美しいこころの持ち主であった為、美しさを守り、長命の薬をあげようと言 人間は死ぬことになった。アカリヤザガマは叱られて桶を担いで永久に月の中にいる

蛇は脱皮、 再生を繰り返す不死の象徴なのである。

古墳であるとされる。 全国で十四例の発掘があるが、 また、金井典美によると、長野県諏訪市神宮のフネ古墳には蛇の形を思わせる「蛇行剣」が発掘されている。 金井は、 蛇行剣を副葬する古墳被葬者が聖俗両方から族長であるという性格を持つとする(34) フネ古墳は諏訪神社上社の神域にごく隣接した丘に発掘されたもので、五世紀の 「来のものでないかと考えている。

図1に示すのは高さ十二センチほどの女性像である。 縄文中期のものと考えられている。

またこの蛇行剣は日本国内の古墳出土の数が少ないため、

中 国由

ñ 長のつり上がった目ととがったあごの上に小さな口が透けられている。 右目からは三筋の線が流れおちて

切



図1 土偶

出典:長野県、藤内遺跡、N・ナウマン『生きの緒』より転載

である。 部に口を大きく開けてとぐろを持つ蛇が装飾としてつけられていることである。 る。そしてこの像を月神をあらわすものと比定している。三本の筋の涙もまた、不死の水で月に属するものなの の仰韶文化に見いだしており、イランにまでその源流がたどれるとしている。 おり、これをN・ナウマンは生命の水である涙をあらわすとしている。 イチョウ形の眉をもつ。 N・ナウマンもこれを踏襲して 類似の像をC・ヘンツエ 異様なの は後 は 中 国 頭

蛙

蝦蟇はまた人を不死身にもする。 表現され、また造形までされている。 じだという信仰である。 ている。 特に歳を経た蝦蟇は五月五日に捕らえて干すことになっている。 蛙もまた不老不死のシンボルである。 中国では、人には魂と魄と言う二つの霊魂があると信じられている。 この詳細は軽視できない。 蝦蟇-W ・ エ -厳密にいえば三本足の蝦蟇は月に棲む動物である。さらにはこう述べ バーハルトによると中 蝦蟇が月に棲む動物だとされていたことは、 蝦蟇の足で大地に絵を描くと水が流 国の神話では蛙と蝦蟇は密接に関連する。 (中略) 霊魂の形が蝦蟇と全く同 時には直接的に れ始める。

淮南 淮 に身を託すようになり、 れ、これもまた、古代中国の仰韶文化に類縁性があるという。 南子の天文訓に「故に陽燧、 訪地方の縄文土器文様を分析した小林公明によると、 子の覧冥訓 には 「羿は不死の薬を西王母に請い、 これがヒキガエルになったのである。また、月にはよく知られたように水の信仰がある。 日を見れば即ち火となり、 姮娥がそれを盗んで月に走った」という。 方諸、 蛙の文様は関東および中部地 淮南子の精神訓には 月を見れば、 即ち津いて水となる」。 「月中に蟾蜍あり」と記され 方の遺跡に多く見いださ そして姮娥は月

ナウマンも述べている。

蘇りの水でもある。また、 死者に捧げられる「明水」と呼ばれるものが、 大きく手を広げた蛙の手の指が三本であることは月の新月の三日間をあらわすとN 月の水であることを小林は述べてい る。 これはまた、

仰韶文化の彩陶土器にも、 両手、 両足を開いた蛙の文様が大きく描かれているのである。

月と蛙と死者の水とのかかわりがあり、 それが土器文様に象徴的に表現されている。

小 林はまた頭部がない のは、 土器に首を突っ込んで飲んでいる様子をあらわしているとしている。 これらの土

かと推測されている。

器は日常の生活用のものではなく祭祀用のものであろう。

中に入れられた不死の水は酒のようなものでなかった

図2は藤内出土の半人半蛙像である。 手は三つに分かれ蛙の特徴を持っているが、 足は上に蹴り上げたように

描かれており人間とも蛙ともとれる像である。

現代を結びつけることは無理であることは明白である。底に流れる太陰的要素を問題としたい。 することにして、柱立てに関して何らかの仮説を提示することでこの論考を終えたい。 これらの縄文文様に関してはそのほかにも、 多くの論述がなされているが、 紙面の都合上、今はそれらを割愛 縄文時代と古代 中世

かは定かではない。 を立てたことが知られる。 柱立てに関する確実な記録は一三五六年の 画詞には桓武の時代から始まったとされる。 式年遷宮の際に立てられたのが、 『諏訪大明神画詞』で一〇〇〇人から二〇〇〇人の力で数十本の柱 初めであるが、その式年遷宮がいつから始まったの

原 みたい。 の矢瀬遺跡でも、 これから述べることは全くの仮説であり、 青森の山内丸山遺跡でもまた、 巨大木柱を立てたことが知られる。 新潟の寺地遺跡、 今後の考古学的研究によるところが大きいことを承知の上で述べて 単に神のよりしろだけであるならば、 金沢市のチカモリ遺跡、 能登半島の真脇遺跡、 日本の他の 地域に 上毛高

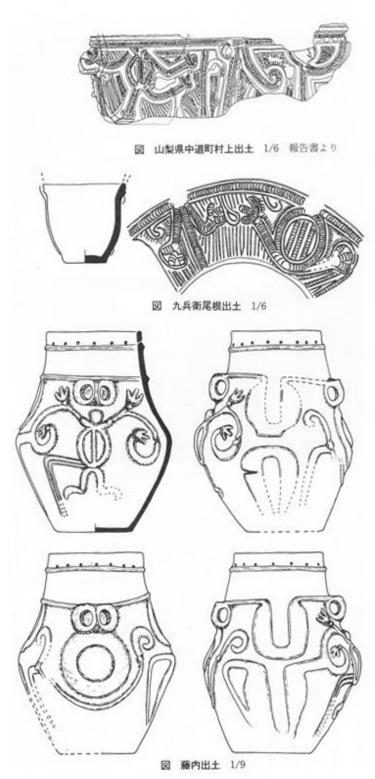


図2 縄文土器の蛙文様

出典:小林公明「新石器時代中期の民俗と文化」『富士見町史 上巻』370頁より引用。

も柱立てはあって良いはずである。 諏訪地方だけに残っていることは、 よほど古層の信仰のあり方を示すもので

あろう。

ることと暮れの神事で御室に入れられるそそう神の大蛇の長さもまた五尺五丈あることを指摘し、これを蛇体 いる清水がある。そのそばに柱が立っている。 また、 諏訪信仰の発祥の地であるされる前宮 みずめとは蛇の異称であり、 (中世の神事はここで行われた)には水眼と呼ばれる冬でも流. 田中基は一の 柱の高さが五尺五丈あ れ 7

上昇して、柱になったものとしている。

以上、 諏訪信仰の太陰的性格について述べてきた。 御佐口神を初めとする重要な神々の考察が不十分であり、

中国の神話の理解をまた今後の課題として、ここらで筆を置きたい。

- (1) 宮坂清通『諏訪の御柱祭』甲陽書房版一九五六。
- (2) 折口信夫「御柱の話」『折口信夫全集二十巻』。
- (3) 宮地直一『諏訪神社の研究』(下)一蒼洋社一九八四。
- (4) 宮地直一、同前。
- (5) 宮地直一、同前。
- (6)『袋草紙』岩波書店 新日本古典文学大系一九九五、九七頁。
- (7) 田中基「縄文のメドゥーサ」現代書館二〇〇六、二三六頁。
- (8) 宮地直一、同前。
- 9 伊藤富雄、 「同著作集第二巻— 諏訪上社 『年内神事第旧 記 釈義」 永井出版企画 九八九。
- (10) 田中基、同前。
- (11) 田中基、同前。
- 〔12〕 宮地直一『諏訪神社の研究』(下)六六五頁、同前。

- 13 柳田国男 「石神問答」 『柳田国男全集十五巻』ちくま文庫一九九〇。
- 14 伊藤富雄、 同前。
- 15 金井典美 『諏訪信仰史』名著出版一九七七。
- <u>16</u> 森田晃一 「生島・足島神社の御柱祭に関する歴史的考察」 松崎憲三 諏訪系神社の御柱祭』 岩田書院二〇〇六

所収。

- 17 『諏訪市史』六九〇頁。
- 18 『諏訪市史』六七〇頁。
- 19 松本隆信『中世における本地物の研究』 汲古書院一 九九六。
- 20 福田晃『神道集説話の成立』三弥井書店一九八四。
- 21 松本隆信、 同前。
- 23 22 常陸風土記、 行方郡 [風土記] 日本古典文学大系、岩波書店、

Ŧi. 兀 $\overline{\mathbb{F}}_{0}$

- N・ネフスキー 『月と不死』東洋文庫、一一―一四頁。
- 金井典美、
- 金井典美、 同前 (図は省略した)。
- ネリ ĺ ナウマン 『生の緒』言叢社二〇〇五。

26

25

24

同前。

- ・エバーハル } 『古代中国の地方文化』六興出版、
- 田 中基、 同前。

28 27